

スポーツ科学：スポーツのトレーニングおよびコーチングに関する基礎的研究

韓国におけるスポーツ教育政策及びサッカー界の政策変容に伴う育成年代の子どもへの影響

李 宇ヨン (文学部教授)・東海林 毅 (城西大学経営学部助教)・飯田 義明 (経済学部教授)

1. 目的

韓国における近年の教育制度の変容に伴って、プロサッカー選手を目指す小・中・高生(以下：子ども)の競技力向上のための現状が変化してきている。そこで本稿では韓国における教育政策の資料をもとに、現場に関わっている指導者や親からの聞き取り調査を行い、現在の状況の変容について検討した。本稿の詳細については、令和2年度に発行されるスポーツ研究所紀要に発表しているのをご一読いただきたい。

2. 研究方法および調査対象者

韓国サッカー関係者4名から現状に対する情報を得て、それを基に調査対象者にインタビューを行い検討した。調査対象は、小学校でプレーする選手の父親1名(A氏)とKリーグのJrチームに所属する選手の父親1名(B氏)、そしてA氏の子供の個人レッスンを行っているコーチ1名(C氏)の3名であった。

3. 結果および考察

3-1. 子どものトレーニング環境

A、Bの両氏も時間減少の点を指摘している。A氏の子どもは、「トレーニングする時間が短くなった」ことによって、小学校に通い部活動と個人レッスンを受けている。そして、「プロ選手を目指す子どもは学校以外でのトレーニング環境を親が整えてあげなければならない」と言う。これまでの様々な政策変更によって、「学校でのトレーニングは時間的に限られてしまう」それゆえ、それを補うため「個人レッスンを薦めている指導者も増えている」と言い、その個人レッスンを受けさせるために「親の経済的負担が大きくなった」と述べている。

B氏の子どもはK2クラブの下部組織に所属している。B氏は、Kリーグが2008年にユース制度を導入した後、これまでの学校部活動へ良い選手が流れていたのが、2010年の基本政策、2013年のKリーグの規定改正などにより良い選手が学校部活動から下部組織に流れを熟知していた。そのため、「良い選手の親は、経済的負担が少ない下部組織のチームを望んでいて、良い選手が集中してしまう」と述べ、「子どもがユースチームに昇格できなけれ

ば、勉強をさせて大学に行かせる」とも考えている。また、「競技力向上だけではなく経済的理由からも良い選手は下部組織を希望する選手、親も多くなっている」と指摘している。この理由として、クラブは経費などを負担してくれるが、部活動の場合は個人負担になるためである。つまり、教育政策やKリーグの規定改定によりプロ・サッカー選手を目指す子どもを持つ親の階層が上昇している可能性がある。

3-2. 子どもの将来に対する親の考え

A、B氏ともに下部組織に所属できないようであれば、サッカーを諦めさせ勉強をさせることを選択している。特にB氏は、理想として「サッカーも勉強も両立させたい」と述べつつも「現在は子どもの思うようにサッカーをさせているが、ユースに上がることが出来なければ(サッカーを)諦めさせて勉強させますよ。韓国のスポーツ界は厳しいから」と述べている。A氏も「結果が出なければ、諦めさせる」と述べている。ここには、子どもの主体的な意思というよりは、親の考え方が強く反映されているように思われる。これは、韓国社会が「個人の学歴が職業的地位と非常に強く結びついており、子供たちは日本以上に早い段階から過剰なまでの受験に対する負荷を背負っている」(有田, 2006) 社会であることとも無関係ではないだろう。そうであるからこそ、「学歴」を獲得するために大学を経てプロ選手を希望する子どもが多い傾向を示していた(飯田義明ほか, 2007)。しかし、現在では、下部組織のユースからプロ選手に昇格している選手が増加しており、これは金が指摘した「引退後の社会適応に困難を引き起こす」(金, 2002) ような子どもを増加させる可能性を潜在的に持っているように考えられる。

3-3. 指導者の環境とそこから見える現状

C氏は、大学卒業後、地域の小・中学校でコーチや監督を歴任していたが、2015年から現在のような個人レッスンコーチとしていまは生計をたてている。C氏によると、現在は「全体のトレーニングの後とか土・日に個人レッスンを受ける学生が増えている」状況であるという。

レッスンを受けている子どもの親たちの経済状況については、「経済的に余裕がある家庭の子供が多いが、レッスンのために共働きの親もいる」と述べている。つまり、貧しい家庭の子どもがスポーツを利用して社会階層を上昇させてきた時代は変わり、スポーツにも経済格差の影響が見て取れる。

4. 結語

本稿の目的は、韓国におけるスポーツ教育政策の資料を基に、プロ・サッカー選手を目指す子どもたちの状況変容について現場に関わっている指導者や親からの聞き取りから以下の3点が示唆された。

- 1) 子どもたちは、このトレーニング時間の減少を補うために、本来の練習時間以外に個別にレッスンコーチを付けて技術を身につけさせるようになっていた。
- 2) 親は経済的な負担が高くなるなどの問題点が示唆された。その視点から現状の変化を考察したとき、スポーツの世界においても経済格差が、子どもたちの競技力に影響を与えていく可能性があることが示唆された。
- 3) 厳しい学歴社会である韓国では、キャリア選択において子どもの意思より親がその方向性に強い影響を与えていると考えられた。

引用参考文献

- 有田 伸(2006)：韓国の教育と社会階層，東京大学出版会。
 金 大勲(2002)：韓国元一流競技者の「引退」への実例研究「学歴社会」と「戦略」の間，スポーツ社会学研究 10, pp.101-114。
 飯田義明ほか(2008)：韓国高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向，身体運動文化研究, 13(1), pp.49-61。

【付記】

本研究は、平成30年度、平成31年度(令和元年)専修大学研究助成制度 李宇ヨン「韓国プロ・サッカー選手を目指す子どものキャリア・パスに関する実態調査」及び、飯田義明の科学研究費補助金(課題番号17K01735)による研究成果の一部である。また、2021年3月の発行予定の専修大学スポーツ研究所紀要に掲載される予定である。